阪神・淡路大震災から20年～上下水道の災害対策

PR

過去の災害を教訓に、〝もしも〟の時の準備を行いましょう！

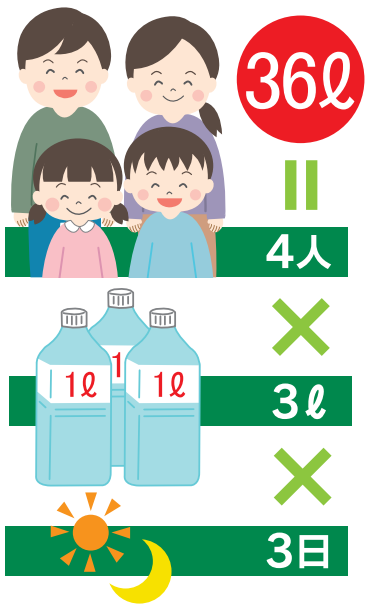
1月17日で、阪神・淡路大震災の発生から20年を迎えます。まだ記憶に新しい東日本大震災での教訓も含め、この節目の時期に〝もしも〟の時の備えについて家族で話し合っておきましょう。熊本市上下水道局でも、災害に備えたさまざまな準備を進めています。

上下水道編

家庭でできる防災対策～水の備蓄とトイレ対策

4人家族で36ℓの水の備蓄を

人が生きるためには、**1日当たり1人3ℓ**の飲料水が必要であるとされています。蛇口から水が出なくなった時のために、**ご家庭での飲料水の備蓄をおすすめします。**備蓄する量は、1日3ℓ×家族の人数×3日分が目安です。水道水も保存することができ、清潔な容器に水道水を満たし、ふたをして冷蔵庫（冷暗所）で保管すれば1週間程度は保存可能です。



流さないトイレを準備！

災害により断水すると、水洗トイレが使えなくなります。紙オムツの素材を便器に設置して使用するものや、段ボール製の非常用簡易トイレなどがインターネットで紹介されているので、ぜひご準備を。

あると便利な水タンク

防災グッズの中に、折りたたみ式の水タンクを加えられることもおすすめします。

もし、水道が出ないときは？

上下水道局からの情報提供

断水や復旧状況、応急給水場所については、**ホームページ、ラジオ**などのほか、職員による地域での説明、チラシ配布、広報車による案内などを通じてお知らせします。

断水や漏水などの場合は下記にご連絡を！

応急給水や復旧には、皆様からいただく情報が大切です。「いつから」「どこが（住所やご近所の様子）」「どんな状況か（断水・濁水、道路に水がにじんだり、噴出しているなど）」、**詳しい情報をお待ちしています。**

熊本市上下水道局
営業時間内：水相談課
☎096（381）5600
営業時間外：時間外業務窓口
☎096（381）0012

阪神・淡路大震災と東日本大震災

国内観測史上初の震度7を観測した1995年1月17日発生の阪神・淡路大震災では、水道・電気・ガスなどのライフラインが一瞬にして途絶えました。これを契機に国や自治体・事業者の災害への備えが抜本的に見直し・強化されました。しかしながら、2011年3月11日に発生した東日本大震災では、地震動に津波被害が加わり、水道事業だけをとっても257万戸に断水が発生する事態となりました。

	ライフライン被害額 水道・ガス・電気・通信・放送施設	社会基盤施設被害額 河川・道路・港湾・下水道・空港等	断水戸数
阪神・淡路大震災	約6千億円	約2兆2千億円	約130万戸
東日本大震災	約1兆3千億円	約2兆2千億円	約257万戸

※出典　被害額及び阪神・淡路大震災断水戸数：内閣府（防災担当）
東日本大震災断水戸数：厚生労働省健康局水道課

※原発事故による被害調査未実施地域を除いた戸数

「大災害の現場を経験して」

阪神・淡路大震災および東日本大震災の発生時には、多くの熊本市上下水道局の職員が復旧や調査のために現地入りしました。その時の体験談をご紹介します。

阪神・淡路大震災復旧支援

熊本市上下水道局 水相談課　佐藤 公成

1995年2月7日、水道局（当時）と管工事協同組合で初の官・民一体の復旧支援隊を編成し、兵庫県芦屋市へ出発しました。復旧工事を行うため、重機や作業車等も持参し、ナビのない時代でしたので地図だけを頼りに、夜通し高速道路をひた走りました。テレビで見ていた阪神高速道路の倒壊を実際に目にし、こんな大きなコンクリート柱が折れるのかと愕然としたことを覚えています。

翌日の早朝、到着した芦屋市役所も被災しており、多くのご家庭で断水が続いていました。復旧工事を行う付近に宿舎を確保できず、毎日、新大阪駅から通勤しながら、復旧工事を続けました。通常、折れることはないと思っていた鋳鉄管（水道管）が折損していたり、液状化現象によりマンホールが道路から突き出ており、傾斜地が何カ所も崩落していました。

現在、水道管の耐震化や漏水防止に携わっておりますが、20年前の罹災後の避難所生活の方々の食事やトイレ、お風呂もままならないご様子を思い出しますと、水道水の安定供給のため日々尽力したいとの思いを強くします。

復旧支援隊の前に出動した応急給水支援隊の活動記録より（神戸市）

東日本大震災 下水道被害調査にあたり

熊本市上下水道局 下水道整備課　林 政義

私は、2011年3月28日から宮城県亘理町と白石市で、被災した汚水を処理施設まで送る下水道管やマンホール、汚水ます、ポンプ場などの現況調査にあたりました。

罹災による深い悲しみの中においても、落胆することなく避難所で気丈に振る舞われている方々から、「一日も早く復興して元の暮らしに戻りたい！」という希望が込められている思いを強く感じ、調査において最大限の努力をする決意を新たにしました。地元の職員の中には家族の安否すらも不明の方もおられ、それでも不眠不休で復旧作業にあたられている姿を今でも思い出します。

この経験を生かし、災害が発生した場合は市職員として迅速な対応を心掛け、市民の皆様の生命と財産を守ってまいります。

地盤が沈下し、マンホール管が突き出した状態に（白石市）

熊本県調査隊（県・熊本市・八代市）の調査報告写真より（白石市）